

鈴木信太郎文庫展 ―マラルメとフランス象徴派―

獨協大学図書館

会 期： 2012年1月18日（水）～1月28日（土） *2階は21、22日を除く。

展示場所： 天野貞祐記念館1階エントランスホール
図書館2階貴重書展示コーナー

獨協大学父母の会が主催する鈴木道彦名誉教授による講演会が1月28日（土）に開催されます。

これに伴い図書館では、講演に関連する「鈴木信太郎文庫」の一部と、信太郎先生の著作および後継研究者による関係の深い出版物を展示します。「鈴木信太郎文庫」は、鈴木道彦先生の御尊父であるフランス文学者・鈴木信太郎先生が蒐集されたもので、1994年に本学に寄贈されました。これらは本学貴重書コレクションの中でも一級資料として特に有名なものです。

なお、今回の講演会では、この貴重なコレクションについて解説していただく予定です。父母の会会員以外の方も参加可能ですので、参加希望の方は当日直接会場受付にお越しください。

講演会開催日時：2012年1月28日（土）14時～15時（開場13時） 天野貞祐記念館大講堂

【鈴木信太郎文庫について】

この文庫は、フランス文学者鈴木信太郎（1895-1970）の遺族を代表して、鈴木道彦名誉教授（当時フランス語学科教授・図書館長）から1994年に本学に寄贈されたもので、洋書5,356冊、和書1,303冊で構成されている。

洋書は二つの軸を持っている。一つはステファヌ・マラルメ（Stéphane Mallarmé）を中心とする十九世紀フランスの象徴派とその周辺の詩人たちの作品であり、いま一つはフランソワ・ヴィヨン（François Villon）を中心とする中世文学関係の書物である。これらがそれぞれ、鈴木信太郎自身の主要な研究に繋がっていることは言うまでもない。

本文庫の中で最も貴重なものは、「世界は一冊の美しい書物になるべく作られている」とまで言ったマラルメの数点の著作である。とりわけ、ポオ（Poe）作、マネ（Manet）画、マラルメ訳の『大鴉』Le Corbeau（1875年）、同じくマネの挿絵入り『半獣神の午後』L'après-midi d'un faune（1876年）、著者の自筆を石版印刷にした47部限定の『ステファヌ・マラルメ詩集』Les poésies de Stéphane Mallarmé（1887年）などは、代表的なものである。

このほか、マラルメの心酔者であったポール・ヴァレリー（Paul Valéry）は、ほとんど鈴木信太郎と同時代の詩人であったために、彼の著作としては『海辺の墓地』Le cimetière marin（1920年）を始めとする多くの初版本が含まれており、これらもまた本文庫の一焦点を形成している。

さらに、今では入手が困難になったマラルメ以降のマイナー・ポエットたちの作品も、象徴派の研究者にとっては見逃すことのできない貴重な資料に数えられるだろう。

和書には、日本最初の仏語学者といわれた村上英俊作の辞書や、江戸末期から明治初期にかけての語学書や翻訳書もあり、そこには中江兆民の編んだ仏和辞典も含まれていて、仏学事始めの時期の雰囲気的一端を窺うことができる。またかなりの署名本や限定出版物が納められているのも、本文庫の特色である。

【展示物解説】

2階 鈴木信太郎文庫

- 1) マラルメ著, マネ画 『半獣神の午後』 初版 1876年 アルフォンス・ドレンヌ書房刊
“L'après-midi d'un faune”
限定 195 部中の 105 番。表紙は日本の奉書に純金押箔刷。挿絵の 1 葉は美濃紙の 2 色刷。この作品は後にドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』を生み、今世紀に入ってニジンスキーの振付で、バレエ『牧神の午後』となったものである。
- 2) ステファヌ・マラルメ作, 鈴木信太郎訳 『半獣神の午後』 1933年 江川書店刊 (個人蔵)
フランスで 1876 年に出版された『半獣神の午後』初版の瀟洒な美しさに魅了された鈴木信太郎は、それを真似て、自分の翻訳をまったく同じ体裁の美本に作り上げた。表紙は原書の奉書紙よりも質の良い純白厚手の鳥子紙を用い、純金押箔も原書通り。マネの挿絵も原寸通りに印刷されている。限定 100 部。これはその No. 1 である。*1月28日のみ展示
- 3) マラルメ 『半獣神の午後』 再版 1887年 ラ・ルヴュ・アンデパンダント社刊
“L'après-midi d'un faune”
限定 500 部中の 169 番。
- 4) マラルメ 『半獣神の午後』 第3版 1887年 ヴァニエ書房刊
“L'après-midi d'un faune”
再版の出来映えに不満だった著者が、初版に則ってその形を縮小して印刷させたもの。
- 5) ヴェルレーヌ 『呪われた詩人たち』 初版 1884年 ヴァニエ書房刊
“Les poètes maudits”
限定 253 部。本書には著者の自筆献辞「シャルル・モリスに その友 P. V. 」がついている。マラルメ、ランボー、コルビエールについて書いたもの。象徴派の詩人を世に知らしめたという点で、きわめて重要な役割を果たした出版である。
- 6) クローデル 『百扇帖』 私家版 1927年
“Cent phrases pour éventails”
限定 200 部中の 103 番。駐日大使として日本に滞在していたクローデルが、「不遜にも日本のハイカイの体裁にならった試作」として作ったものである。170 篇の短詩が書かれ、毛筆のフランス語はクローデル自身の書。
- 7) ヴァレリー 『オード』 1926年 オ・ザルド社刊
“Odes”
ガラニスによるグアッシュ及び銅版画つき。限定 300 部のうち 31 番から 42 番までの 12 部はシャンピオン書房のための特製版。本書はその 35 番。

- 8) ヴァレリー 『海辺の墓地』 初版 1920年 エミール・ポール社刊
 “Le cimetière marin”
 限定 556 部中の 371 番で、地味だが落ち着いた品格のある出版物。「風立ちぬ、いざ生きめやも」の詩句で有名な作品である。
- 9) ヴァレリー 『B手帖』 1924年 国立科学研究所 (CNRS) 刊
 “B. 1910”
 自筆の写真版。限定 130 部中の 41 番。ヴァレリーは 1894 年から死に至るまで、50 年間にわたってノートをつける習慣があった。これは生前に公開され、シャンピオン書房のためにごく少数数作られたきわめて珍しいものである。
- 10) ポー著、マラルメ翻訳、マネ画 『大鴉』 1875年 リシャール・レスクリード刊
 “Le corbeau”
 限定 240 部中の 7 番。全ての奥付に、マラルメとマネの自筆の署名がある。マラルメの処女出版で、大鴉のついた表紙は羊皮紙。エクス・リブリス (蔵書票) には、マラルメの自筆で「ヴィクトール・マルグリットに その友 ステファヌ・マラルメより」という献辞が記されている。
***1月28日のみ展示**
- 11) マラルメ 『ステファヌ・マラルメ詩集』 1887年 ラ・ルヴュ・アンデパンダント社刊
 “Les poésies de Stéphane Mallarmé”
 著者自筆石版印刷。限定 47 部で 7 部は非売品。残りの 40 部中の 38 番。詩人が生前に自らテキストを決定した唯一の総合詩集。フェリシアン・ロップスの銅版画 2 葉つき。9 輯の分冊で、全冊揃いは世界でも珍しく「幻の詩集」といわれる。 ***1月28日のみ展示**

1 階 鈴木信太郎および後継研究者による著作

- 1) エドモン・ロスタン作、辰野隆、鈴木信太郎訳 『シラノ・ド・ベルデュラック』 1922年 白水社刊
 限定 1500 部中の 913 番。背は皮装で金字を使用し、装幀が美しい。鈴木信太郎は、東京大学在学中から、辰野隆、山田珠樹らと同人雑誌『玫瑰珠 (ろざりよ)』を刊行し、そこに辰野と共訳の『シラノ・ド・ベルデュラック』(1919-1920) を発表した。その後、白水社から本書が出版されたが、これには大学時代の師であるエミール・エックの序文のほかに、森林太郎 (鷗外) の序文がつけられている。
- 2) 鈴木信太郎訳 『近代佛蘭西象徴詩抄』 1924年 春陽堂刊
 ボオドレエル、マラルメ、ヴェルレエヌ、ランボオなど、17 名の近代フランス詩人による 36 篇の詩が訳出されている。また各詩人について、他の詩人や評論家によって書かれた批評や解説の訳も添えられている。上田敏の『海潮音』(1905年)、永井荷風の『珊瑚集』(1913年) の後をうけて、鈴木信太郎や堀口大学による訳詩の時代がここから始まった。
- 3) 鈴木信太郎著 『文学附近』 1936年 白水社刊
 鈴木信太郎は随筆家としても知られている。このほか『文学遁走』(1949年)、『記憶の蜃気楼』(1961年)、『虚の焦点』(1970年) などの著作がある。

4) 鈴木信太郎著 『ヴィヨン雑考』 1941年 創元社刊

15世紀のフランス詩人ヴィヨンについて、著者はまず白水社刊行の『ラ・スムーズ』1925年4月号に「四行詩」の翻訳を發表しているが、その年にフランスに留学すると、リュシアン・フウレエについて本格的に中世フランス語を学び、帰国後に改めてヴィヨン研究に取り組んだ。その研鑽の成果として刊行されたのが、師のリュシアン・フウレエに献げられた本書と、後に刊行されるヴィヨンの訳詩である。なお、標題の文字は著者の自筆である。

5) 鈴木信太郎著 『ステファヌ・マラルメ詩集考』 1948-1951年 高桐書院刊

マラルメの全詩篇について、あらゆる関係資料を詳細に点検し、『マラルメ詩集』はどのようなテキストをどのように配列して構成すべきかを論証した労作。厳正、精緻な文献学的研究の成果であるこの著書により、1951年度の読売文学賞を受賞した。品格のある装幀で、ホイッスラーによるマラルメの肖像や、『大鴉』、『半獣神の午後』の挿絵、マラルメの自筆を写真石版刷にした『ステファヌ・マラルメ詩集』の1ページなどの写真も掲載されている。

6) 『鈴木信太郎全集』 1972-1973年 大修館書店刊

全5巻、補巻1巻。鈴木信太郎は、マラルメその他の象徴詩とヴィヨンを中心とする中世文学研究に先鞭をつけたことで知られているが、この全集にはその主要な業績が収められている。第1、2巻は訳詩、第3、4巻は研究、第5巻は随筆によって構成されており、補巻には同人誌『玫瑰珠(ろざりよ)』に発表した短篇小説も数篇収められている。装幀は、生涯を通じて親しく交際した高島達四郎。

7) 鈴木信太郎著 『フランス詩法』 2008年 白水社刊

1925年に文藝春秋社刊の『文藝講座』に発表した「フランスの詩に関する考察」を皮切りに、その後、東京大学での数年にわたる講義や、雑誌『ふらんす』への連載などで、長期間の推敲を重ねた末に、1950~54年に白水社から上下2巻で出版された。展示資料はその復刻版である。本書は1955年に日本藝術院賞を受賞している。

8) 『マラルメ全集』 1989-2010年 筑摩書房刊

全5巻。各巻に別冊で、ときには翻訳本体を上回る厚さの膨大な訳注と解説がついている。編者はいずれも鈴木信太郎に指導された戦後世代の代表的フランス文学者で、なかには評論家や演劇人として活躍している者もいる。師の研究を引き継ぎ、それをさらに広い視野で展開して、世界でも類を見ないほどの精密な理解にもとづく詩人の全体像を実現した。このようなマラルメ全集はフランスにも存在していない。第1巻は鈴木信太郎に献げられている。

9) マルセル・プルースト作、鈴木道彦訳 『失われた時を求めて』 1996-2001年 集英社刊

全13巻。プルーストは、ジョイスやカフカと並ぶ20世紀西欧の代表的な作家で、小説の概念を一変させた人物。マラルメを尊敬して、作品にも引用しており、広い意味での象徴派的風土に属している。これは井上究一郎訳に次ぐ日本で2人目の個人全訳で、晦渋・難解という定評を払拭する目的で試みられた。訳者は本書により2001年度の読売文学賞と日本翻訳文化賞を受賞している。挿絵はエコール・ド・パリの画家ヴァン・ドンゲン。